法養寺の文化財

大田区指定文化財（彫刻・絵画・古文書）

所在地：法養寺　池上1-19-25

交通アクセス　池上駅から徒歩15分

公開の有無：通常非公開

法養寺の歴史

法養寺は、日蓮宗の寺院です。現在は池上本門寺のすぐ近くに所在しますが、当初は神田三河町（千代田区）に開かれたと伝わっています。開創については、天正15年（1587）頃という説や、妙経院日等が天正６年に開いたという説があります。

慶長年間（1596～1615）に、池上本門寺の第12世仏乗院日惺が徳川家康から授けられた下谷稲荷町（台東区）の一画に移転しました。この頃のお寺を下谷法養寺と呼びます。郊外の池上本門寺よりも江戸城に近いことから、女性の救済を説く日蓮宗を信仰した大奥の女性たちの参詣先となり、お堂には、将軍や大奥の女性が寄進したお像が安置されました。

現在の法養寺

江戸城本丸と西の丸、大奥の祈祷所となった下谷法養寺では、将軍家の慶事や要請に応じて祈祷をおこない、その際の神仏への供物や、防火や盗難の御利益で名高い護符（お守り）を幕府に献上したほか、大奥からの求めに応じ、江戸城内で仏像や神像の出開帳（霊験あらたかな尊像を寺外で公開すること）をおこなっていました。こうした幕府中枢との密接な関係から、本寺である池上本門寺に並ぶ寺格をみとめられ、将軍の代替わりに江戸城で催される大名列席の能を拝見することを許されるなど、特別な待遇を受けました。

法養寺が池上に移転してきたのは、明治時代のことです。その際、江戸時代に開かれた池上本門寺塔頭（子院）である妙教庵と合併し、山号を勧明山から妙教山へと改めました。

こうした歴史をたどってきた法養寺には、江戸城への献上品を納めるのに用いた黒漆塗葵紋蒔絵箱や護符など、江戸時代の信仰や、幕府と寺社の関係を知る上で重要な文化財が多数伝来しています。そのうち、本堂の須弥壇中央に安置されている日蓮聖人像と釈迦涅槃刺繍画像、約160件の古文書が、区指定文化財となっています。区指定の古文書群には、日蓮宗の高僧が記した曼荼羅本尊や幕府とのやりとりの記録、大奥の女性からの書状といった下谷法養寺から引き継いだもののほか、明治時代に合併した妙教庵に伝来していた史料も含まれています。

下谷法養寺
熊谷稲荷の防火護符

日蓮聖人像のすがたと制作年代

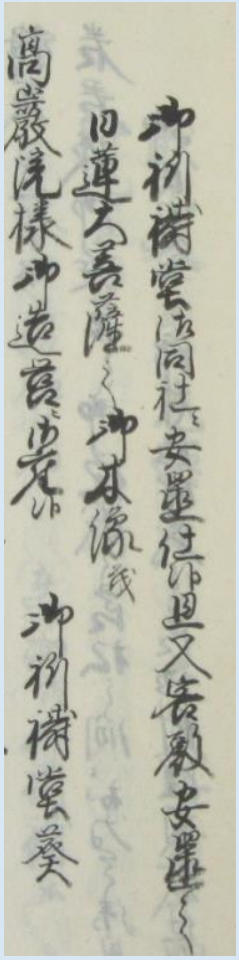
日蓮聖人像は、像高51.9㎝の、針葉樹を用いた木彫像です。左手に経巻を持ち、首の後ろに三角形に立ち上がる襟の付いた法衣をまとった姿は、日蓮の七回忌にあたる正応元年（1288）に弟子たちが造立した池上本門寺像（重要文化財）にはじまる、日蓮の肖像彫刻の典型を踏襲したものです。寄木造りという構造で、目に水晶製の玉眼をはめ込んでいます。衣の質感や人体の量感、端正で若々しい顔立ちを自然に表現し、すぐれた出来栄えを示しています。

日蓮聖人坐像

かつて本像は、鎌倉時代あるいは室町時代の作と判定されていました。しかし、令和4年（2022）に大田区教育委員会が実施した再調査で、像内を観察すると、比較的新しい木材が用いられていることが判明しました。木材の寄せ方や表面の彩色、作風などの観点から、江戸時代前半の17世紀に造立されたと考えられます。現状では、造立年や発願者を示す銘文は像本体からみいだされませんでしたが、玉眼の水晶を内側から押さえる木に巻かれた紙片に、像の制作に関するなんらかの情報が記されている可能性があります。指先の一部などを欠失しているものの、後世に補われた新材はなく、像全体が造立当初の造形をよく保っていることも確認されました。

日蓮聖人像の伝来

文政11年（1829）年成立の『新編武蔵風土記稿』によれば、明治時代に法養寺と合併した妙教庵の安置仏に、日蓮聖人像はありませんでした。一方、法養寺に伝来した『公用帖』という江戸時代の史料には、下谷法養寺の客殿というお堂に安置されている木造の日蓮聖人像は徳川４代将軍家綱の御台所高巌院（顕子女王、1640～76）が造立したものだという記述があります。したがって、現在法養寺に伝わっている日蓮聖人像は、高巌院が寄進したお像にあたると考えられます。このお像については、もとは江戸城本丸に安置されていたもので、高巌院が懇願したことで、家綱により奉納されたとの言い伝えもあります。高巌院は、下谷法養寺を支えた有力な檀家で、『公用帖』には、土蔵や、葵の御紋付きの赤地金襴の水引（須弥壇や厨子にかける幕）なども寄進したと記されています。



御祈祷堂御同社ニ安置仕候且又客殿安置之
日蓮大菩薩之御木像茂
高巌院様御造営ニ御座候　御祈祷堂葵

『公用帖』(区指定文化財）のうち
弘化4年(1847)4月付文書(部分)

『公用帖』は、下谷法養寺と幕府がやりとりした書状の写しをまとめたもの。当該部は、お堂の改修費を調達する勧化（募金）の許可を幕府に求めた嘆願書中の一文で、将軍や大奥の女性ゆかりの諸堂や宝物、尊像を列挙し、改修の必要性を強調している。

日蓮聖人像の制作を手がけた仏師について

日蓮が最期のときを過ごし、荼毘に付された池上を中心に、大田区内には数多くの日蓮宗寺院があり、江戸時代に造られた祖師（高僧）像も多数現存していますが、中でも法養寺のお像は、傑出した出来栄えを示しています。将軍の御台所による寄進という伝来の事情も考慮すると、本像の造立に、七条仏師あるいは周辺の仏師が関与した可能性があります。

七条仏師とは、鎌倉時代に活躍した運慶以来の伝統を継承した、京都仏師の集団です。江戸時代前半に、日光輪王寺（栃木県）や上野寛永寺（台東区）などにおける将軍家の重要な造像事業、幕府御用に独占的に従事し、江戸時代の仏師集団の頂点に立っていました。彼らの仏像は、鎌倉時代の仏像によく学んだ、非常に整った作風を示し、高度の造形力を感じさせます。

釈迦涅槃刺繍画像

法養寺には、高巌院の妹で、紀州藩２代藩主徳川光貞の正室となった天真院（照子女王、1625～1707）が、寛文3年（1663）に寄進した釈迦涅槃刺繍画像も伝わっています。亡くなった釈迦とその死を悼む仏菩薩や弟子、信者、生き物たちの姿を、刺繍であらわしています。釈迦の螺髪の部分には、糸ではなく、天真院の前髪が用いられています。これは、逆修（生前に自身の冥福を祈る仏事）や故人の追善供養のため、中世以来おこなわれてきた髪繍という技法です。表面左端の銘文から、縫物師戸塚七兵衛が制作したことが知られ、裏面には、薩摩藩島津家出身の大奥の女性が施主となった寛政８年（1796）の修理の銘文があります。法養寺では、7月22日の施餓鬼法要の際にお堂にお祀りされます（天候次第）。縦194㎝・横222.4㎝のとても大きな作品のため、当日は、大人数人がかりで、慎重にお堂に掛けられるそうです。

日蓮聖人像の寄進者高巌院と天真院は、いずれも皇族の伏見宮家に生まれ、徳川家当主の正室となった姉妹です。ふたりとも熱心な法華信者で、法養寺だけでなく、多数の日蓮宗寺院に尊像やお堂を寄進したことが知られます。

釈迦涅槃刺繍画像

熊谷稲荷に関する遺品

熊谷稲荷とは、元来、江戸時代に熊谷安左衛門という人が浅草寺（台東区）に祀った、白狐に乗る姿の稲荷明神です。諸願を成就させ、火難や盗難を防ぐ霊験で知られ、江戸市中の数ある稲荷明神の番付で上位に入るほど、熱狂的な信仰を集めた流行神でした。

現在も法養寺境内のお堂に祀られている熊谷稲荷大明神像は、その分霊です。下谷法養寺に安置されていた尊像の中で、かつて最も有名で、大奥からの要請で、江戸城にたびたび出開帳しました。法養寺に伝来した『熊谷稲荷縁起』という史料によると、この像は、元禄15年（1702）に式部法橋という仏師によって制作され、はじめ信者の家に祀られましたが、多くの奇瑞があらわれたことから、享保20年（1735）に、高巌院に仕えた大奥御年寄（大奥の諸事を差配した高位の役職）の戸沢の取り持ちで、下谷法養寺に奉納されたとのことです。

この『熊谷稲荷縁起』は、『浅草寺裏門稲荷宮来由』という史料と共に、立派な黒漆塗の箱に納められ、大切に保管されています。『浅草寺裏門稲荷宮来由』は、熊谷稲荷が最初に祀られた浅草寺稲荷宮の縁起を記した文書です。浅草寺にあった原本を写し、享保20年に熊谷稲荷大明神像と共に法養寺に奉納されたと考えられています。明治時代の神仏分離の際、浅草寺の熊谷稲荷は寺から排され、他の神々と合祀されてしまったため（現在の浅草神社）、浅草寺にあった原本は、いまなお所在不明とのことです。非常に有名な流行神であった熊谷稲荷の沿革を伝える法養寺伝来の『浅草寺裏門稲荷宮来由』は、江戸時代の民間信仰を知る上で重要な史料として注目されています。

『熊谷稲荷縁起』と『浅草寺裏門稲荷宮縁起来由』を納める黒漆塗箱の蓋裏の銘文

『熊谷稲荷縁起』と『浅草寺裏門稲荷宮来由』を納める黒漆塗箱が制作された経緯もまた、11代将軍家斉の御台所広大院に仕えた御年寄瀧山（？-1840）が、文化13年（1816）に下谷法養寺に送った書状により知ることができます。それによれば、熊谷稲荷大明神像が江戸城に出開帳した際、岩井と富田というふたりの表使（御年寄の命で、諸大名家女中との外交を担当した大奥女中の役職）が寄進を申し出て、奉納したとのことです。同じ書状の中で、瀧山は、自身の母の新居の祈祷とその戸口に貼るための火難・盗難除けの稲荷の護符の手配を、下谷法養寺に依頼しています。

瀧山は、日蓮宗の熱烈な信者であったことで著名な、初代将軍家康の側室養珠院と同じ、正木氏出身です。『公用帖』収載の「御祈祷御名前牒」（1810-16年頃）によれば、瀧山は、下谷法養寺の拝殿の再建のため、多額の寄付もしており、熱い信仰心がうかがわれます。法養寺には、彼女のお墓があります。

このように、法養寺には、大奥の女性たちによって生み出され、大切に守り継がれてきた多種多様の文化財が伝わっています。

（写真はすべて大田区教育委員会所蔵、無断転載禁止）